

日本の洋画130年 珠玉の名品たち

2025年5月31日(土) - 7月21日(月)

拝啓

時下、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

当館では、下記の通り、「日本の洋画130年 珠玉の作品たち」を開催いたします。つきましては、展覧会の詳細をご案内いたしますので、ご取材・ご紹介などのご協力を賜りますようお願い申し上げます。

敬具

記

◆開催趣旨

明治維新前夜の大きな時代のうねりの中、日本の美術界にも激動の時代が訪れます。初めて見る西洋画の迫真性に魅せられた高橋由一は日本近代洋画の道を開き、渡欧して西洋画を学んだ五姓田義松や黒田清輝、藤島武二らがその礎を築いていきます。自由主義的な気運が高まった大正期には萬鉄五郎や岸田劉生らが独創的な作品を制作、またフランスで前衛的な美術に触れ帰国した梅原龍三郎らは、日本的油彩画の確立を目指しました。

本展では、当館館長・副館長の作品にまつわる思い出とともに、江戸末から昭和まで、およそ130年にわたる日本の洋画史を所蔵品でたどります。

◆おもな出品作品

高橋由一(1828-1894)《鮭図》1879-80年 油彩 板 (後期出品: 6月下旬より)



高橋由一は、明治10年前後に集中的に鮭を描いたという。それまで、絵画のモチーフとして考えられなかった鮭だが、由一に傾倒した多くの画学生が、この主題に取り組んだ。そのため、この時代に描かれた《鮭図》は数多く存在する。その中で、由一の真筆とされているのは、東京藝術大学、山形美術館(寄託)、そしてこの笠間日動美術館が所蔵する三点である。いずれも、鮭の頭やうろこの光沢、肉や骨などが克明に描かれ、由一の優れた技術を見ることができる。なかでも、当館所蔵の「鮭図」は、加筆がなく大変貴重なものといえる。また、板に描かれているのが特徴で、板の木目が柱に吊るされた鮭をリアルに演出している。縄で結ばれた荷札には「日本橋中洲町 美妙館まつ出」とあり、正月の進物用として届けられた新巻鮭を描いたものと思われる。日本橋区の成立が明治11年(1878年)とされており、それから作品の制作年を推察している。日本という国が鎖国から開国、文明開化の変換する時代を生き、後進に多くの影響を与えた画家、高橋由一は、1894年、66年の生涯を閉じた。この年、日清戦争が勃発、日本はアジアの近代国家として、踏み出していくのである。

青木 繁(1882-1911) 《二人の少女》 1909年 油彩 カンヴァス



旧久留米藩士、青木廉吾の長男として福岡県久留米市に生まれ、中学時代から、久留米在住の画家森三美(み

よし)に洋画の手ほどきを受けた。友人たちと文芸誌を出すなど早熟な文学少年であった。中学を中退して上京し、小山正太郎の不同舎に入門。翌年、東京美術学校西洋画科で黒田清輝の指導を受け、1903年、《黄泉比良坂》(東京藝術大学蔵)で第一回白馬会賞を受賞した。翌年、卒業して、恋人の福田たねや坂本繁二郎らと千葉県の上野に滞在し、この時に描いた《海の幸》(1904年 アーティゾン美術館蔵)は、第八回白馬会で評判となった。父の没後は経済的に逼迫して家族とも衝突し、1908年10月以降は、熊本や佐賀など九州各地を放浪した。1909年7月には、佐賀に住む少年時代の恩師、森三美を無一文で訪ねた。《二人の少女》のモデルは森の二人の娘で、青木は画中の日傘を、姉娘の手を引き街中を探して歩いたという。私は、日傘越しの柔らかな光に包まれた少女を印象派風に描いたこの作品に、青木の異なった一面を見たようで、手元に残したいと思った。青木は、《海の幸》や《わだつみのいろこの宮》(1907年 アーティゾン美術館蔵)など、重要文化財に指定される作品を遺したが、生前は名声を得ることはなく、放浪生活の中で肺を患い、療養中の病院で28年の人生を終えた。

金山平三(1883-1964) 《下諏訪のリンク》 1922年 油彩 カンヴァス



第四回帝展に出品された本作は、三井コレクションの一点で、よもやマーケットに出るとは思っていなかった。1976年に刊行した『金山平三画集』(日動出版)の表紙となった作品で、当

館の金山コレクションの目玉になると、思い切って購入した。

金山は神戸の元町に生まれ、高等小学校時代から退学になるほどの腕白で、同志社予備学校の寄宿舎に入ったが、ここでも手作り炬燵を失火させ放校処分となった。しかし東京美術学校進学後は一転して、黒田清輝、藤島武二らに師事し、首席で卒業した。面白いものである。1912年に渡欧、パリを拠点にヨーロッパを巡り、伝統的な絵画技法を学んだ。帰国後は文展に出品、1944年には帝室技芸員となるなど高く評価されたが、1935年の帝国美術院改組を憂い、その後24年間、官展に出品せず、一時は幻の画家とも呼ばれた。

生涯、現場で描くことにこだわり、雪の降る日でも戸外で絵筆を走らせた金山の雪景色は、観るものに寒さが伝わる。金山に魅せられたコレクターは多い。山形県大石田の金子阿岐夫もその一人だ。学生の頃、大石田に疎開していた金山と出会い、その人柄に魅了され、医者となってから収集を始められたという。晩年、作品を散逸せずに顕彰してもらいたいと、37点もの金山作品を当館に託されたのであった。

萬鉄五郎(1885-1927) 《赤マントの自画像》 1912年 油彩、カンヴァス



村山槐多とともに萬は、私の好きな画家の一人である。いち早くゴッホに深く影響を受け、フォーヴィスムからキュビスムまでを研究し、独自の表現方法で描いた稀有な才能を持った画家である。次々と海外の美術様式を試み、卒業制作の《裸体美人》(1912年 東京国立近代美術館蔵)は、フィンセント・ファン・ゴッホを思わせる筆致と大胆な構図で、萬の代表作として知られている。またこの時代、様々な表現を取り入れながら、自画像も数多く描いた。ヒュウザン会に出品されたこの《赤マントの自画像》もそのひとつで、当館の自画像コレクションの中でもひとときわ異彩を放っている。

岸田劉生(1891-1929)《寒山風麗子像》1922-23年 紙本墨画淡彩



テレビ東京の娯楽番組「なんでも鑑定団」の影響もあるのか、美術品の鑑定書が一般にも関心が寄せられる時代となった。昨今では、物故作家の作品には鑑定書が付いているのが主流となってきた感がある。しかし、誰が鑑定したかが重要であることを、案外知らない方が多い。鑑定書は、その作家の画業を詳しく知っている人が書くべきで、それゆえ、日動画廊の鑑定業務は作家によって鑑定家は異なっている。

《寒山風麗子像》は、劉生が32歳で宋画にとりつかれていた時代の作品で、見た瞬間に、眼が離せなくなった。愛娘の麗子をここまで奇妙に描いたことにも驚いたが、不思議な微笑をたたえた表情に、見れば見るほど惹きつけられた。この作品を手に入れてから、さらに劉生の収集に力を注いだ。現在、笠間日動美術館の劉生のコレクションは160点ほどあり、これは当館の近代洋画家のなかで一番多い数である。

◆会期中のイベント(検討中)

・講演会「思い出の作品たち」(仮題)

日 時: ○月○日(土)、午後2時から(約1時間) / 会 場: 企画展示館2階

講 師: 館長 長谷川徳七、副館長 長谷川智恵子

・担当学芸員によるギャラリートーク

日 時: 6月○日(土)、7月○日(土) 各日午後2時から(約30分)

会 場: 企画展示館

◆展覧会の詳細

日本の洋画130年 珠玉の名品たち

会 期: 2025年5月31日(土)-7月21日(月)

会 場: 笠間日動美術館 企画展示館(茨城県笠間市笠間978-4)

主 催: 公益財団法人 日動美術財団

開館時間: 午前9時30分より午後5時(入館受付は午後4時30分まで)

休 館 日: 毎週月曜日

入 館 料: 大人1300円、65歳以上1000円、大学・高校生900円、中学生300円、小学生無料

20名以上の団体は各200円割引 障害者手帳をお持ちの方、その同伴者1名は半額割引

後援予定: 茨城県 / 茨城県教育委員会 / 笠間市 / 笠間市教育委員会 / NHK水戸放送局 / 茨城放送 /

朝日新聞水戸総局 / 茨城新聞社 / 共同通信社水戸支局 / 産経新聞社水戸支局 / 東京新聞水戸支局 /

毎日新聞社水戸支局 / 読売新聞水戸支局

担 当: 金澤 Email: kanazawa@nichido-garo.co.jp

〒104-0061 東京都中央区銀座5-3-16 日動画廊 TEL 03-3571-2553

亀山 k-museum@nichido-museum.or.jp

〒309-1611 茨城県笠間市笠間978-4 TEL 0296-72-2160

■ 交通案内

◆ JR 利用

- ・常磐線友部駅北口(9:50/10:50/11:50 発)より、かさま観光周遊バスで約15分
「日動美術館入口」下車徒歩1分(1回100円/1日フリー乗車券300円)
- ・水戸線笠間駅より徒歩約30分、レンタサイクル約10分、市内循環バスで約5分「日動美術館入口」下車徒歩2分
かさま観光周遊バス、またはレンタサイクルの利用が便利です。

◆ 自動車利用

- ・常磐道友部 JCT 経由、北関東道友部 IC より国道355号線経由約6km
- ・東北道栃木都賀 JCT 経由、北関東道笠間西 IC より国道50号線経由約8km

■ フランス館長谷川仁・林子記念室

「ピカソ、フジタ、夢二…画家が作ったセラミック・アート」

会 期： 2025年4月18日(金)-7月16日(水)

■ 次回企画展予告

「アニマルアート展」(仮題)

会 期： 2025年7月26日(日)-9月28日(日)

会 場： 企画展示館

担 当： 湊 Email: nichido.minato@gmail.com

以上